

# 25年間の生き物の移り変わり

～ 処分場事業と動植物の変遷 ～

日の出町谷戸沢廃棄物広域処分場における

動植物の変遷に関する調査報告書

平成 22 年 3 月



東京たま広域資源循環組合



感じのよさ：ゴミ処分場と秋の七草



麻布大学野生動物学研究室教授 高槻成紀

### 都会人の発言

ある野生動物関係の集会で、中年のご婦人が次のような発言をした。

「人間は暑ければ冷房、寒ければ暖房をしますが、そんなことをする野生動物はいません。勝手なことを言わないで生きているんです。そういう動物とみんな仲良くすればいいではないですか。」

その集まりは私たちが野生動物とどうつきあってゆくかを考えることを目的としたもので、たとえば高山帯にシカが進出して高山植物を食べるようになった問題をどうするかといったことを議論した。これはなかなかむずかしい問題である。農業被害であればそれを駆除つまり射殺を含めて防除するということは理屈もはっきりしているのだが、自然植生への影響はどうだろう。シカだって野生動物であり、野生動物が野生植物を食べるのはごく自然なことで、これは「被害」というのだろうか。もちろん貴重で美しい植物を食べられるのは、たとえば高山植物愛好家からすれば「被害」かもしれない。しかしシカ・ファンからすれば、「かわいいバンビちゃんを殺すなんて許せない」となる。私たちはそうしたことをふまえて、この難題の解決を議論していたのだった。

「またか」

このご婦人の発言に私はかなりうんざりした気持ちだった。よくある「愛護論」である。これがいかに間違っただけであるかをかいつまんで考えておきたい。

第一に東京にお住まいのようであるこの人ご自身は冷暖房をしていないのだろうか。そうであれば見上げたものであるが、そうだとすると電気やガスを使わないとは思えず、電車を使わないとも思えない。ご自身の主張は野生動物がしないことを人間だけがするから悪いとのことだが、このご婦人は自分は野生動物のように生きているつもりなのだろうか。世界中の誰に聞いても、東京在住者ほどエネルギーを浪費している者はないと答えるはずだ。私はあまりに粗雑な言い分とうんざりしたのである。

そうした「理論」の粗雑さだけではない。すべての生き物が懸命に生きていることは、私のように50年も生き物を観察してきた者が一番よく知っているが、だからみんな仲良くするとはどういうことか。このご婦人の台所にゴキブリがたくさんいて、家の中に蚊やハエがぶんぶん飛んでもニコニコしておられるのであれ

ば、私も多少は納得してあげたいが、そうでないことは聞かなくてもわかる。人が快適な生活をするのと、すべての生き物をたくさん生かすことは相矛盾するのである。この人は要するにうすっぺらなことばだけで「みんな仲良くしましょう」といっているだけで、そこにはきれいな花やかわいい哺乳類や鳥類しかイメージされていない。そのような小学生のような考えを情緒で塗り固めて、研究者は残酷だといわれても対応のしようがない。しかも、私たちが時間をかけてこういう難問をどうするかについていくつかの議論をした、その最後の段階に出された無思慮な感情論であった。自分を棚に上げた勝手な言い分、事実の誤認、ほかの人の意見の無視と、それは見事な迷惑満載ぶりである。幸か不幸か時間切れになったので、私は気の重い対応をしないですみほっとした。

### 東京のゴミ

私たちは生きている限りほかの動植物を食べ、排泄する。世の中がどう変化しても不変の事実である。その現実には直視するしかない。動物の保護についての考えは人さまざまでもよいかもしれない。しかし「私は上品だからウンチはしません」という訳にはいかないのである。

都市という特殊な空間は膨大なゴミを出す。これもまた人の排泄と同じ宿命のようなものである。私は仙台に住んでいたときに東京のゴミが東北地方に廃棄されるという話を聞いて腹が立ったことがある。自分の出したゴミは自分の土地で処理すべきだと考えたからである。さもないとゴミを出さない生活を選択すべきであろう、と。しかしその後東京に住むことになり、実際に都内で処理をしていることを知って感心した。現実を正しくとらえ、ものごとをきれい事に終わらせることなく現実的な処理をしていることを知ったからである。そしてその処理に関わることでさらに感心すべきことを知ることになる。

### 感じの良さ

中国の経済発展がめざましい。ずいぶん威勢がよいようで、秋葉原で「今日一日で百万円を使う」と鼻をふくらませながらおっしやる中国人をテレビで見た。貧困にあえぎ、悪政に泣いてきた中国の人が豊かになることは嬉しく思うし、1980年代に四川省の奥地でパンダの調査に参加して中国の現実を見た者として、今昔の感を感じながら「よかったな」とも思う。しかし誰でも感じるように、こうした浪費を見て「いい感じ」は受けない。ただ恥ずかしながらちょっと前の日本のノーキョーさんはこれとまったく同じだったはずだということも忘れてたくない。これに比べると、経済的にはずっとビハインドだが、例えばリトアニアで国民が森に集まって歌を歌うことに懸命であるとか、鎖国に近い状態のブータンで人々が高い満足度をもって自然を大切にしながら王様を尊敬しているといった話を聞くととても「いい感じ」がする。その意味で、戦後の日本はどう考えてもいい感

じの国ではなかった。友達でいえば、特定の目的をもった人は仲良くするかもしれないが、ふつうの人は進んでつきあおうとはしないタイプといわざるをえない。

#### 東京のゴミ処分場跡地

さて、東京のゴミ処分場である。大量にたまったゴミは巨大な穴に入れて土で覆われた。文字通り「臭い物にフタ」だが、フタをしてコンクリートで固めて駐車場にでもするという手はあったはずである。だが谷戸沢処分場ではその跡地の一部を生き物の復元の場所と位置づけた。処分場を作るためには雑木林を切り、沢をつぶすことは避けがたかった。それは多くの宅地や道路ができるときに起きた自然破壊のひとつであった。都市が「発達する」とはそうすることであり続けた。しかしここでは、そうして野生動植物に迷惑をかけたことを認識した上で、せめてその傷を最小限にし、癒すことを選択したのである。埋め立てられてグラウンドのようであった裸地はいまや見事なススキ群落となった。その規模はおそらく東京でも有数のものと思われる。また人工池を作ったおかげで驚くほどの水鳥が「戻って」きた。そればかりかその鳥を狙ってオオタカもすみつくようになった。犠牲になる鳥には申し訳ないような気もするが、各地で失われたオオタカと鳥の捕食・被食関係が甦ったのである。場内は立ち入り禁止であるから、野生動物にすれば安全な空間である。水鳥ばかりでなく、さまざまな哺乳類も入ってくる。これまでにタヌキ、キツネ、ハクビシン、ノウサギ、アナグマなどが確認されている。戦後の東京で人口が増える過程でどんどんとすみ場を失ってきた動物たちである。とくにノウサギは激減したといってよい。「うさぎ追いしかの山」は日本人であればだれでも体験したことであったはずだが、今やこの歌も歌詞だけが化石のように残っているという状況である。そうした中でゴミ処分場のあとにノウサギが戻ってきたというのは朗報というべきであろう。カヤネズミも戻ってきた。この体重が7グラムほどしかない小さなネズミはカヤ、つまりススキなどに球状の巣を作るかわったネズミで、ススキ群落が失われるとともに減少して、各県で絶滅危惧種に指定されている。それに国蝶であるオオムラサキの生棲も確認された。実はこの蝶も茅場ではないが半自然にすむ里山的な生き物なのである。

私が感心したのは、こうした動植物の変化をこつこつと記録してきたことである。粘り強い調査によってさまざまな動植物の変化が捉えられ、次第に豊かになってきたことを読み取ることができる。そのようなことの重要性を正しくとらえ、予算確保を含めて調査を実現継続してきた関係各位に敬意を表したい。

#### 何を守ったのか

私はあまり「いい感じ」でなかった戦後の日本で、ゴミを他県に押しつけることなく、迷惑をかけた動植物のことを思いやり、実際にその復元を実現したというのは実に「感じのいい」ことだと思う。それはきれいごとをいいながら現実に

フタをすることの多い都会人の中にも、思慮深く良識を持った一群の人々がいたことを示している。もちろん処分場跡地に特別に珍しい動植物がいる訳ではない。ごくふつうの生き物たちである。しかし、いや、だからこそ価値があるのだと思う。コウノトリやトキの復帰に巨額を投じ、マスコミを動員して、国をあげての復帰が行われている。それはそれでけっこうなことである。しかし冠婚葬祭が記憶に残るから大切であるか、時間にすれば99%である平凡な日常が大切であるか。その評価は人によって分かれようが、大半の時間をついやす日常が大切でないはずはない。同じ意味で、真のやさしさは平凡な生き物にこそ注がれるべきで、谷戸沢処分場ではそのことが実現されてきたのである。

### 気がかり

よいことばかりで文章を終えたいところだが、気になることも書いておかねばならない。ひとつは処分場にアライグマも入ってきたことである。この困りものの外来動物は気が荒く、頭がよく、運動能力にも長けている。水棲の動物群集は強い影響を受ける。タヌキなど資源が重複する動物への影響も懸念されるし、トウキョウサンショウウオの卵のうを食べることも確認されている。またトウキョウサンショウウオといえ、信じがたいことだが、明らかに人によって卵のうが盗まれていることがわかった。状況はプロによる仕業であることを強く示唆している。せつかくの多くの善意によって野生動物が戻ってきても、ほんの一部の心ない人によって絶滅の心配される動物が盗まれているのである。ここでも処分場が避難所となって一部の卵のうが守られたが、保護のためには処分場跡地とその周辺の森林がセットとして守られなければならない。

### 秋の七草

最後に夢を書いておこう。

10年ほど前にこの処分場の今後について相談を受けたとき、私は何もしないでススキ群落が甦るにまかせてほしいと提案した。実はそのころ、この処分場跡地の一部にはコスモスやダリアなどの園芸植物が植えられていた。またサクラを植えるという案もあったと聞く。「跡地を有効利用する」と聞けば、何か珍しく人目を引くものにしたいというのは誰でも考えそうなことだ。しかしそんなものはどこにでもある。私はそれはやめて欲しいと頼んだ。一方、自然を回復させるということであるから、原生林にすむ珍しい動植物の復元を期待する向きもあった。だが、私はかつてはどこにでもあり、日本人が親しんできたススキ群落、つまり「茅場」の復元を提案したのであった。これは造園的な感覚でもなく、また狭義の自然保護とも違う。かつての里山は農業のために必要があって管理してきた半自然であった。茅場はそのひとつであり、そこには秋の七草があり、ノウサギやモズがいた。決して貴重な動植物を守っていたのではない。

このことは多くの都市民が誤解していることでもある。自然を守るといえば、知床や白神山地や屋久島のことをイメージし、原生自然を人の手から守ることだと考える。それは正しいのだが、日本のような先進国においてはそのような自然は例外的であり、ほとんどの自然は多かれ少なかれ人に管理されているのである。それもまた、いやそれこそが日本の伝統的自然の保全であった。そうであれば谷戸沢処分場跡地に戻ってきた自然をどのような自然にすべきかのコンセンサスをもち、そのための管理を行う必要がある。私はそれを茅場に定めたのである。

そのことが10年近く経って実現されてきた。跡地の一角には見事なススキ群落に戻ってきたのである。外来牧草がちょぼちょぼ生えていたグラウンドのようであった場所が、今や人がいても見つからないほどの背丈のススキ群落になり、秋には銀色の穂が風になびく。ノウサギもカヤネズミも戻ってきてくれた。園芸植物には気の毒だが、宿命として自然に消えて行った。

私の夢はこのススキ群落を秋の七草が甦る群落にすることである。すでにススキとクズは十分にあり、ハギもある。一部にはオミナエシ、キキョウ、ナデシコもあるようだが、フジバカマだけはない。だから、このススキ群落に、七草の種子や株を持ち寄ってここに秋の七草が溢れるような群落を作りたい。それは、平安時代から伝わる日本人の自然愛の伝統であり、しかもこれは貴賤を問わない。世界のどこにこのような風習があるだろうか。これこそが「いい感じ」の国であり、お金がなくなればつきあいが途絶えるような関係とは縁遠いものであろう。

そして、こうした場所が各地にできれば、数百年も続きながら戦後になって失われたこの美風が甦ることになるだろう。日本の津々浦々で秋の七草が甦り、多くの日本人がそれを愛でる。

それがかつては公害大国と呼ばれ、自動車の大生産国で、世界から食糧を買いあさり、膨大なゴミを出すらしいあの日本でおこなわれていることを知れば、世界中が日本を「いい感じ」の国と見直すことであろう。そして自分の国で七つの草を探すかもしれない。「うちには秋の花はあまりないので春の七草を選んだの。バイオレット、ヒヤシンス、スノードロップ、ブルーベル、えーとそれから」などという会話が聞こえたらどんなにか素敵だろう。

私たちは季節に敏感で、ありふれた植物の中に美を見いだした日本人の感性を引き継ぐ秋の七草を愛でるといふ美風を、自分たちの出したゴミの上に復元するという実にロマンに溢れたプロジェクトを実現できる幸運に恵まれている。この25年間の記録を振り返ると、私たちが少し手を加え、世話をしさえすれば、動植物は正直に反応して確実に戻ってきてくれるということがよくわかる。ゴミも「捨てた」ものではない。

東京たま広域資源循環組合

管理者

稲城市長 石川 良一



東京たま広域資源循環組合は、昭和 55 年 11 月、一般廃棄物最終処分場設置と管理を事業目的として設立された一部事務組合で、多摩地域の 25 市 1 町の自治体で構成されています。循環組合が管理する谷戸沢処分場は、昭和 57 年 7 月に建設工事に着手し、昭和 59 年 4 月、氷雨の降る中、一般廃棄物の埋め立てを開始しました。以来、谷戸沢処分場は、平成 10 年 4 月までの 14 年間にわたって、400 万人の市民生活を支えてきました。現在では、同じ日の出町にある二ツ塚処分場が、一般廃棄物の最終処分場として供用されています。さらに、平成 18 年からは、自治体初となるエコセメント化施設が稼働し、今まで埋め立てていた廃棄物の 8 割にあたる焼却灰が、建築資材等にリサイクルされています。

今の谷戸沢処分場では、埋め立て終了から 10 年以上を経て、自然回復が進み、ススキの穂が風に揺れ、多くの鳥や昆虫が飛び交い、季節ごとにさまざまな草花が咲きほこっております。最近では、国蝶オオムラサキの撮影にも成功しました。建設工事着手からの 28 年間の経緯を振り返ると、まことに感慨深いものがあります。

最終処分場の事業では、安全、適切な埋め立て、維持管理はもちろんのこと、環境調査を着実に実施し、地元自治会をはじめ、日の出町のご理解とご協力を得ることが重要と考え、常に周辺環境には十分に配慮して参りました。その一つとして、谷戸沢処分場に関する動植物のモニタリングを実施して参りました。前例もなく、手探りで始めた生態モニタリング調査ですが、実に 28 年間もの長い間、調査を継続することができました。

今般、埋め立て開始から 25 周年を記念して、今までの生態モニタリング調査の結果を取りまとめた本報告書を作成し、調査報告会を開催しました。そして、生



態モニタリング調査に長年ご協力いただいた、麻布大学の高槻先生、首都大学東京の草野先生、東京大学の須田先生から、それぞれ調査の報告を発表していただきました。また、会場には、これまでに蓄積した貴重な昆虫標本や、なかなか見ることの出来ないオオムラサキの幼虫を展示し、来場者にご覧いただきました。この報告会の聴講には、定員の 150 名をはるかに超える応募があり、たいへん多くの方が谷戸沢処分場に関心を寄せてくださっていることをありがたく思っております。

この報告書は、建設工事前から埋め立て終了後以降までの変化について、できるだけわかりやすくまとめるように心がけたものであり、全国の最終処分場の維持管理にも参考になるものと信じております。

最後に、本報告書作成にご尽力いただいた諸先生方に感謝申し上げ、私からの挨拶といたします。

## 目 次

### 第 章 生態モニタリング調査報告会

1 生態モニタリング調査報告会 .....	1
2 調査報告 .....	2
3 講演 .....	3

### 第 章 生態モニタリング調査の概要

1 調査目的 .....	21
2 調査内容 .....	21
2-1 調査項目 .....	22
2-2 対象範囲 .....	22
2-3 調査期間及び頻度 .....	23
2-4 調査方法 .....	24
3 谷戸沢処分場事業の概要と環境の変化	
3-1 埋立事業概要 .....	27
3-2 場内環境の変化 .....	27

### 第 章 動植物の変遷

1 植物調査結果の概要 .....	31
2 昆虫類調査結果の概要 .....	36
3 両生類・爬虫類調査結果の概要 .....	49
4 鳥類調査結果の概要 .....	55
5 哺乳類調査結果の概要 .....	58
6 ビオト - プの創出 .....	60
7 環境教育 .....	72
8 まとめ .....	74
9 谷戸沢処分場の管理と生態モニタリング調査に関する提言 .....	75

用語集 巻末